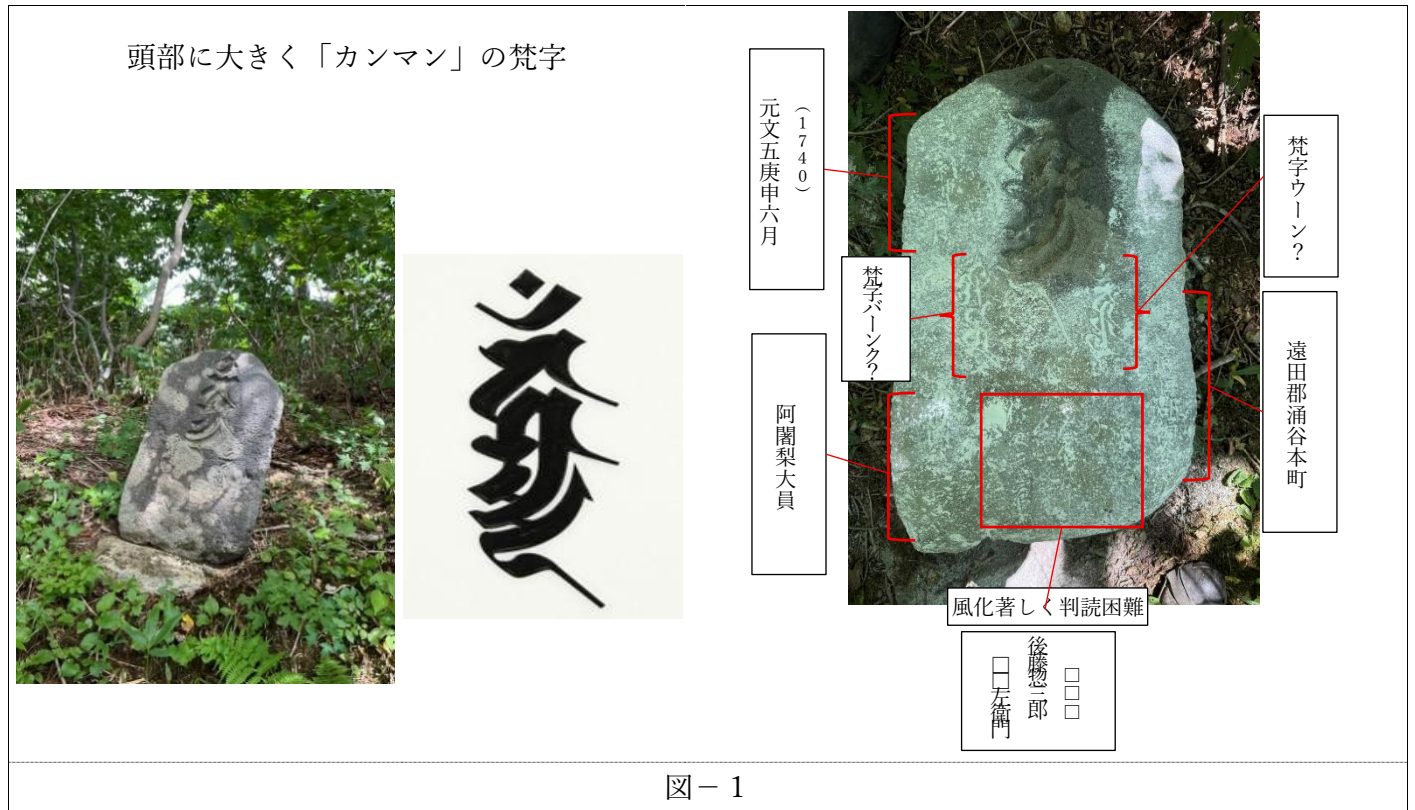


世にいう「硬い信念 揺るぎない信念 ぶれない信念」などは糞喰らえ！である。

出羽三山月山東南エリア「高・清フレンドリー古道」の清川道（登山道）に、烏川不動滝（不動尊）と遠くの湯殿山に向いあうように図－1のと通りの不動明王（カンマン）碑が寄進建立されている。不動明王の教える処を考察する。



政治家は「硬い信念 揺るぎない信念 ぶれない信念」という言葉をよく口にする、一般の人にも真似てその言葉の使い方を自慢する人がいる。仏教界の人が使う「不動心」と同義語で使ってるのだろうか？ 確かに一見、聞こえはいいが、私は強調されると、頑迷固陋、滞留、硬直、固執、因循姑息、偏頗、こだわり、執着という悪いイメージを持っている。

1. 三つの言葉綴りを取り上げる。

1) 禅の「^{おうむしよじゅう} 応無所住 ^{にしょうごしん} 而生其心」

読み下すと「応（まさ）に住（じゅう）する所無くして、而（しか）も其の心を生ずべし」となる。

返り点を打つと、「^レ応^レ無^レ所^レ住^ニ 而^ニ生^ス其心」となるようだ。

様々な解釈はあるが、平易に言えば、心を一個所に留める、執着することを無く（滅却）して、はじめて、本当の自由な心が生まれるものだ。逆説的には、心を何かにこだわりを持つと、心はそこに捉われて、縛られて、心の自由が奪われることになる。あるいは、真に自由な心は、心を一個所に留めないことに生まれるという教えである。もっと簡単に言うと「**心の無い処に心が生まれる。**」である。これを言葉の遊びだ、矛盾だ、詭弁だと危難するようだと、もはや救いようのない自らを固着した「カタヨリ」である、人生たった一度の尊き命を貰って、自らの自由を限定する不幸者である。

2) 不動心

沢庵和尚（安土桃山時代から江戸時代前期にかけての臨済宗の僧）の『不動智神妙録』から一説を取り上げる。市川白玄著「沢庵宗彭（ちくま学芸文庫）」にり、不動明王の不動とは何かということを説いている部分を図(表)－2に拝借する。

また、この心について松原泰道著「とらわれない心沢庵」（廣済堂出版）155頁より拝借する。「沢庵の言わんとする不動心は、心をあちらこちらに動かしながら、動かした処に心を止めないないのを指すのです。現代ならば車を運転している場合に当てはまりますでしょう。前方の信号や標識からサイドミラーやバックミラーと、すべてにくまなく目と心を注ぎながら、しかも片時もそれらに目や心を止めないのに当たります。信号や標識やサイドミラーに映る映像に心をとらわれたら、かえって心が留守になって事故につながるでしょう。目に映じたままに理解して流していくのが不動智です。」

いわば、動くことと動かぬことの同時併存を言っている、矛盾するようなことを矛盾じゃないとする考え方である。

沢庵が柳生宗矩に与えた「不動智神妙録」の初めに、次の一節がある。 「諸仏の不動智ということがあります。動かぬといっても、石や木のように、全く動かぬという意味ではありません。前後左右、四方八方へ心は自由に動きながら、いささかもとらわれぬのが不動智です。・・・不動明王といっても、実は一心の動かぬところをさしたものの、身がぐらつかないことです。ぐらつかないとは、心が物事に止まらぬことです。・・・物に心が止まると、いろいろの分別心が胸にわき、いろいろ胸のうちに動くのです。・・・止まる心は、動いているようで、自由自在に動かぬのです」。ここに示されている要旨は、次のとおりである。 一、動かぬということは、心が前後左右、四方八方に自由に動くことである。 二、自由に動くのは、心がどこにも止まっていないからである。どこにも心が止まっていないことが、動かぬということである。 三、心が何かに止まると、胸の中にあるいろいろの分別が動きまわる。 四、止まる心は、動いている心である。動いている心は、何かに止まっているゆえ、自由自在に動けない心である。動かないというのは、自由自在に動くことである。 それは心が何か特定のものに、止まっていないからである。心が不動だからである。心が何かに止まると、それをめぐって、あれこれと分別が動きまわる。止まると、動きまわるのだ。動きまわらぬ、心は不動の心である。不動の心はどこにも止まっていないゆえ、自由自在に動くのだ。 止まっている心は、たえずぐらついている心である。ぐらついていない心、すなわち不動心は、自由自在に動く心である。何かに止まる心は、たえず動きまわる心、不安な心であり、動きまわらぬ安定した心は、自由自在に動く心である。 唐の禅匠雲門文偃（八六四～九四九）は、「不動尊とは、どういふのですか」と問われて、「東奔西走」と答えた、という。正法をまもり実現しようと、東奔西走する主体である。自分や物にこだわってはいては、活動の自由は得られない。
図(表)－2

3) 「信念」のこと

そして、細川晋輔著「迷いが消える禅のひとこと（サンマーク出版）」P194に記載の図－3に出会った。「こころをどこにも置かないということは、こころは、いつも『どこにもある』ということ」のフレーズはまさしく矛盾とを感じるだろうが、がしかし、矛盾ではないのだ、私は理解できる。まとめのフレーズ

「かたい信念などによって、人生が、貧しくならないように。」とまさしく私の常々思っている処と一致である。嬉しくなった。

ひとのころは
信念にとらわれてしまうもの
自分はこう生きる
自分はこうすれば勝てる、と
けれど
信念は、かたければかたいほど
一度折れたら
元には戻らない

ころはもつと自由でいい
ひとつところに執着しなければ
ころは自由自在に動き回る
ころをどこにも置かないということは
「どこにもある」ということ
この自然体を手に入れることが
強いころを手に入れるということ
不動心を手に入れるということ

ころの柱を見つめよう
ひとつの筋が通っていれば
柱はゆれていい
きしんでもいい
あるがままに
自由に動き
自分を小さく
押し込めようとするものを
振り払おう
かたい信念などによって
人生が
貧しくならないように

図－ 3

2. 対比的整理／図(表)－ 4

私達の通常識は「留まる・止まる」という字義からは「不動」を当て、自由自在という字義からは「動」を当てるが、仏教（禅）の世界では逆の対応となるのである。

仏教（禅）の見方は、何かの一点に心を留める・止まるということは、その瞬間に次から次への様々な思慮、意味分節を生むことになる、つまりは、分別（分割・区別・差別^{しゃべつ}）の心が止めどもなく湧き上がることになり、その状況を「動」と説明するのである。

他方で、その執着心と真逆の拘らない・捉われない心で、多角的・多面性を以って自由自在に心（視点）を動かすと、つまりは、無分別心（分別を超えた「もの・こと」の無境界化）が止めどもなく湧き上がることになり、いわば、無分別智・無境界（平等相）は新しい「もの・こと」の創造萌芽の基点となるが故にその状況を「不動」と説明するのである。

Aパターン	Bパターン
留まる／止まる／こだわる／とらわれる／執着	自由自在／拘らない／捉われない／無境界
⇓	⇓
分別心／分別知	無分別心／無分別智
⇓	⇓
動	不動
↑	↑
世にいう「信念」	私のいう「正念」

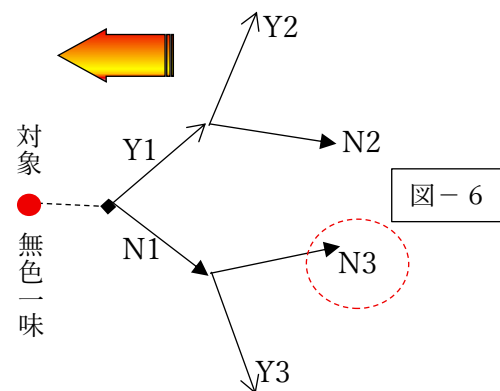
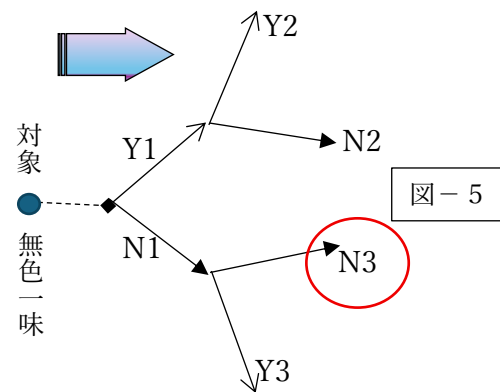
図(表)－ 4

図－ 5 のイメージで、この世の「もの・こと」の元々は、無分別智・無境界（平等相／無色一味）に抽象化されていたが、人間側の意識が思慮分別の作用を持って色付け・意味付け・境界付けの付箋紙をベタベタと対象に貼り付けて行く様相である、この過程の分化・発展の様相を「動心」という。本来の対象は

無限の可能性を秘めていたが、それに人間がその人の勝手な評価を以って、例えば、N3という価値に限定化（一面化）してしまうことになる。このような過程全体を「動心」というのである。

逆に、図-6のイメージで、この世の通俗的な「もの・こと」において、色付け・意味付け・境界付けにベタベタと貼られた付箋紙をどんどん剥がして行き、無分別智・無境界（平等相／無色一味）の真理・真相にたどり着く求一還元（含蓄統一）作用の様相である、このたどり着いた芯（平面的には芯、立体的には筋）の様相を「不動心」という。例えば、限定化・一面化されたY・Nを徹底的に剥がして行く・外して行くと元々の無色一味の対象にたどり着くということになる。無色一味様相を換言すれば、どのようにでも評価（変化）し得るということになり、無限の可能性を秘めたまさに大日如来の性格とでも言える。「創造萌芽の基点」とはこのことを指すものである。

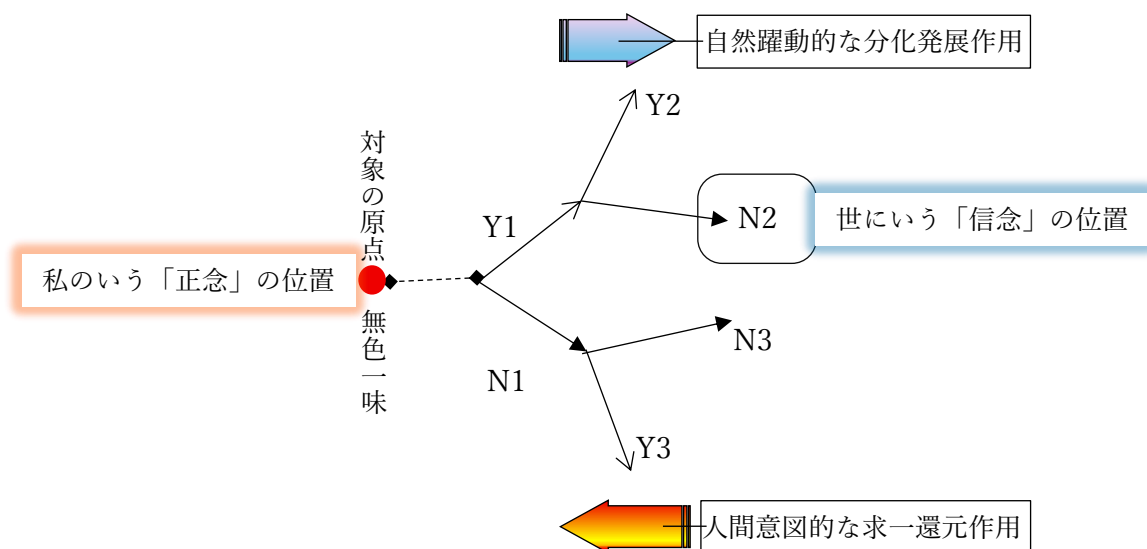
私の日常の心は、喜怒哀楽の乱高下、不定期性一喜一憂の日々であり、対象に執着するからこういう感情が起こるのだ、この感情はまさに「動」のうごめき様態である、これでは人間成長に叶わない、反省・自戒すべきである。



4. 私の正念

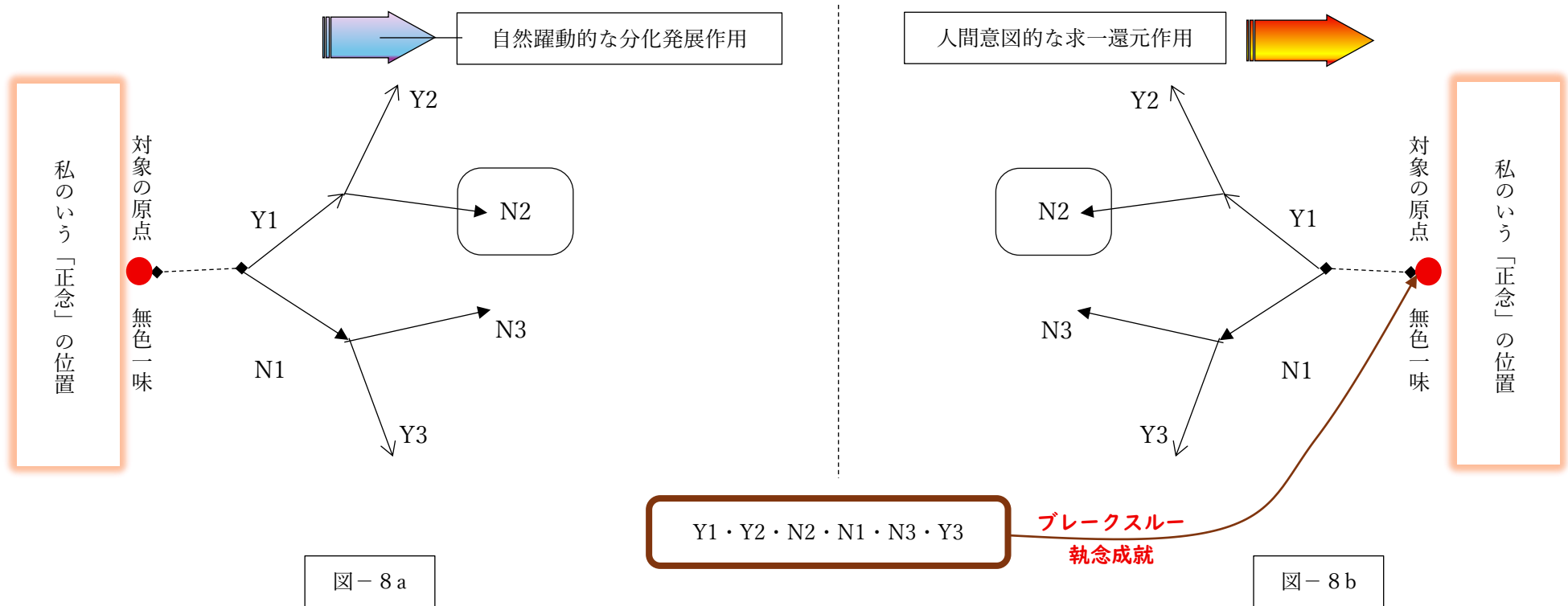
世間一般で称される「信念」は、その意図を汲み取れば私の心においては「正念」といい、すなわち「不動心」相当の無色一味の筋、あるいは正点とでもいうが、「時処位（＝TPO）即応の最適解」、あるいは、「時処位（＝TPO）適宜適切な最適解」を希求する態度をいう。すなわち、一点執着（娑婆のいう信念）とは真逆にある絶対自由世界を象徴する「創造萌芽基点（万事万象原点）」から生まれる、まさに「時処位（＝TPO）即応の最適解」を求める心・言・行のことをいう。

5. 世にいう信念と私の正念の位置



したがって、前記1で取り上げた、(1)～(3)を動機とし、前記の言わんとすることをイメージ図化(構図化)すると図-7のとおりとなる、どうみても、立ち位置は「原点」を求めて強く意識することの重要は一目瞭然である。

図-7を書き換えると図-8のとおりとなり、Y1・Y2・N2・N1・N3・Y3の境目が一気に消滅した時に、その瞬時に無色一味の「創造萌芽基点(万事万象原点)」に到達するが、この現象をブレークスルー(執念成就)と称する。その円満過程を成立させるためには、日頃から「もの・こと」に対する「境界滅却思想」を定着せんとする強い意志が必要である。



ここで浮かんだことがある。2025(令和7)年8月2日(土)～3日(日)、西川町菅野大志町長の視察登山(最大名9名)に同行した最後の日、8月3日(日)下山した別れ際に菅野町長から「片倉忠幸さん、執念を感じた!」とねぎらいのエールを貰いました! みんなの代表としての片倉さんに語りかけた雰囲気でした。そう、片倉忠幸さんの取り巻きに集まった仲間達の境界が消滅したからこそ、町長の心(眼)にブレークスルー(執念成就)が映ったのだろう。分別心・境界心の象徴が利害損得・利得損害の念である、仲間内でこういう心が雲散霧消したからこそに執念成就に至ったのである。

5. 派生的連想

1) そして、利休の作と伝えられる短歌を取り上げる。

「稽古とは一より習い十を知り 十よりかえるもとのその一」

リセット・ゼロベース、初心に戻る、原点回帰、そして、往復、円環などを連想する。
冒頭から取り上げた過去の栄光や成功体験に固執しない人達は、みんなこのような思いで生きて来たのだらう。

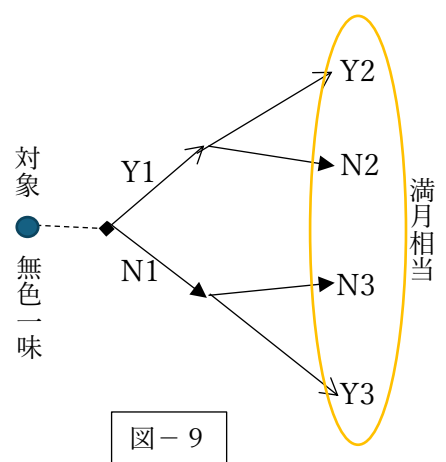
また、別の見方は浮かぶ。一から十までの歩みは向上・成功を目指した「上求菩提^{じょうぐぼだい}」の生き様、しかし、その頂点に奢ることなく、うぬぼれることなく、自分の得た徳を多くの人々に還元・奉仕して行く「下化衆生^{げけしゅうじょう}」の生き方を感じる。公務員とか大企業に勤務した者は、定年退職後、少なくとも 65 歳以上の高齢者になったら、我利我利亡者になること無く、同亡者を卒業し、如何に社会に無償奉仕して行くかを考え、実践すべきではないかと考える。

2) 月の満ち欠け

□ 1 ; 悪く捉える見方、人間は世界で一番偉い、世界の中心にいるとうぬぼれて（錯覚して）おり、図－9 においての現在位置（Y2・N2・N3・Y3）は満月相当である。さらに、分化発展の兆しを自覚すれば、この満月（有頂天）が永遠に持続するものと無意識に思っているものだ。しかし、現実には欠けてやがては新月を迎えるように暗黒の世界・無明の世界に落ちて行くのだ。

□ 2 ; 図(表)－10、月の齋す新月⇒満月⇒新月⇒満月⇒・・・この変化は、太陽の齋す昼⇒夜⇒昼⇒夜⇒・・・の変化と類似する。

天空の両眼「日月」はセットで語られるが、いずれも無分別→分別→無分別→分別→の変転の様相を以って人間に訓える処がある。新月・夜は、ある面ではものの区別や境界や影を作らない世界であり、無分別智と同相同値の世界である。満月・昼はある面ではものの区別や境界や影を作る世界であり、分別知と同相同値の世界である。



図－9

		月の満欠							
		新月	⇒	満月	⇒	新月	⇒	満月	⇒
太陽の昼夜	夜	無分別							
	⇓								
	昼			分別					
	⇓								
	夜					無分別			
	⇓								
	昼							分別	
	⇓								

図(表)－10

(end)